

2023年
4月17日 No.1699



週刊 教育資料

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION <http://www.kyoiku-shiryō.co.jp>



潮流

未来の技術者を育てる「技育」プロジェクト

株式会社サポーターズ技育事業本部本部長、セールス・プロモーション室室長 桑原利旺^①

資料

「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策について」(通知)

———文部科学省

CONTENTS

▶ 2 潮流

未来の技術者を育てる「技育」プロジェクト

桑原利旺(株式会社サポーターズ技育事業本部本部長、セールス・プロモーション室室長)^①

▶ 5 解説・ニュースの焦点

○通学路の対策必要箇所約8割で対策済
○こども家庭庁がスタート、政策試案を公表
編集部

▶ 8 特別資料

改正教育公務員特例法における令和5年4月からの教員研修に関する運用の留意事項及び関連情報について(周知)
編集部

▶ 10 新連載 探究の学びをどう進めるか 子ども主体の学びを

手島利夫(ESD、SDGs推進研究室室長)

▶ 12 新連載 新しい管理職像を求めて——管理職選考への対応 これからの学校管理職に期待したいこと

松岡敬明(東京女子体育大学非常勤講師、全日本中学校長会元会長)

▶ 14 校長講話

新年度、言葉を見つめ直すきっかけを
山口麻衣(東京都文京区立千駄木小学校校長)

▶ 16 実践! 校長塾

自律的な学び手を育てる学校づくり^②
横溝宇人(東京都目黒区立中目黒小学校校長)

▶ 19 資料

「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策について」(通知)
文部科学省

▶ 33 Voice

▶ 35 教育問題法律相談

学校保健安全法に基づく学校安全
角南和子(弁護士)

▶ 36 学習指導要領のアイデアを実践する「深い学び」の理解を深めるために^④

玉置 崇(岐阜聖徳学園大学教育学部教授)

▶ 38 私たち、子どもの全力サポーター! 経験が脳に影響を与える

大橋すみれ(公認心理師)

▶ 40 現場アタマでやろうじゃないか 年度当初からの欠員の危機

石橋昌雄(立正大学社会福祉学部教授)

▶ 42 変わる教育委員会

総合的な不登校対策「戸田型オルタナティブ・プラン」
戸ヶ崎 勤(埼玉県戸田市教育委員会教育長)^①

▶ 44 現場仕込みのメンタルケア論 教師が権威に固執する理由

川上康則(東京都杉並区立済美養護学校主任教諭)

▶ 46 2020年代の新・防災教育 自校の防災対策、再点検を

森田泰司(国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター企画課専門職)

▶ 47 BOOK

『なぜ日本の教育は迷走するのか —ブラック化する教育2019-2022—』

『特別支援教育 通常の学級で行う「愛着障害」サポート 発達や愛着の問題を抱えた子どもたちへの理解と支援』

▶ 48 自著を語る

『Z世代・さとり世代の上司になったら読む本 引っ張ってもついてこない時代の「個性」に寄り添うマネジメント』
竹内義晴(特定非営利活動法人しごとのみらい理事長)

▶ 51 データで見る教育

「GIGA StuDX推進チーム」による活動について ほか

▶ 52 マイオピニオン

校長は一国一城の主
澤田真由美(先生の幸せ研究所代表)

探

究の学びをどう進めるか

ESD、SDGs推進研究室長

手島利夫



第1回 子どもも主体の学びを

現行の学習指導要領には前文が付き、「持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」と明記された。

まさにESD（持続可能な開発のための教育）の教育理念が掲げられている。

先行きが不透明な時代における、これからの学校は、その教育課程編成において、従来の教育目標を見直して、子どもたちが主体的に探究的な見方や考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を育てていく必要がある。

ここでは特に、「主体的な学び」の主役である子どもたちの、「学ぶ心に火をつける」ことと、そのような学びの在り方の変革が学校づくりや「校風」にもつながることについて、私の経験を踏まえて述べたい。

学びに火をつける3ステップ

親や教師が示す目標に向かって「やる気を出す」のではなく、子ども自らが問題に気づき、それを仲間と共に明確にしなが、解決に向けて思考・判断・表現、そして実践を進めていくことがポイントになる。そのためには、単元の導入部に図のような「子どもの学びに火をつける」ための三つのステップを設けることが重要である。

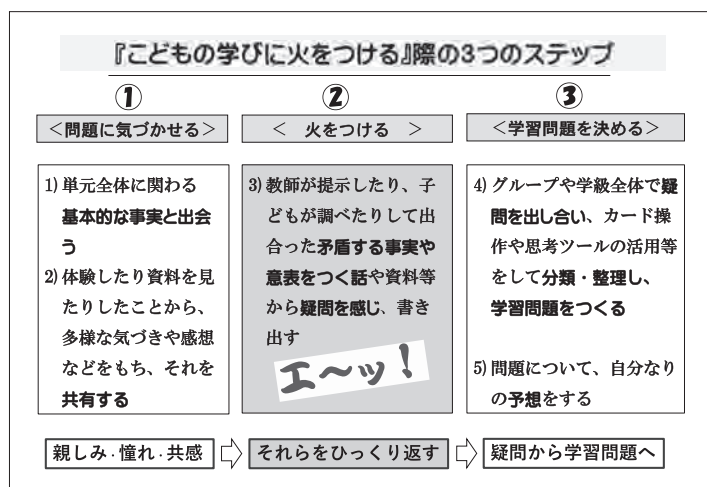
最初のステップは、「問題に気づかせる」こと。体験活動や提示資料を基に、基本的な事実と出合う。ここでは、子どもたちの多様な気づきや感想を共有することがポイントになる。次のステップは、矛盾する事実や意表をつく話、資料などから子どもが疑問を感じて、それを書き出すステップ。最初に気づいて、共有した事実を、いわばひっくり返すよ

うな「意外な事実」と出合う。子どもからすると、まさに「エー」という驚きになり、そのことで子どもたちの学ぶ意欲に「火をつける」ことがねらいである。三つ目のステップは、疑問に感じたこと、調べてみたいことをグループや学級全体で出し合って、分類・整理することで、子どもたちが追究したくなる学習問題を作ること。さらに、その問題について自分なりの予想を立てられると、なお良い。

このステップを踏まえて、自分たちにとって価値のある学習問題を作り、それを調べるための計画まで立てられれば、あとは主体的にも対話的にも学びを進めていくことは容易になる。そしてその結果を活かすことで、自分たちや周囲の人たちの行動変容まで引き出すことができる。探究の学びは、最終的には、その子どもの行動の変容につながる「本物の学び」になる。

ただ、そのためには、導入の段階までに、教師は全体の8〜9割ものエネルギーをつぎ込んで、準備をしておく必要がある。また、子どもたちが自分の考えを整理する際に、「思考ツール」を活用する効果も大きい。特に、子どもたちの考えを「集約化」したり、「価値付け」をしたりすることがやりやすくなるからである。

最近では、1人1台の端末環境が整備され、



こうした思考ツールも画面で操作しやすくなっている。私はよく「KJ法」などで、カードに書き出して、それを分類・整理したり、ラベルを付けたりするなど、手を使ってアナログで十分に操作させる体験を子どもたちにもさせてきたが、こうした体験が豊富な子どもは、デジタル化したツールを使っても、上手に使いこなす土壌ができてきているように思う。単元の導入部の「火をつける」ステップに

ついて説明したが、最も重要なことは、単元全体を通して、子どもたちが何を学習の目標としているかを自覚し、学級全体でしっかりと共有ができていくことである。

職員や保護者も「応援団」に

探究の学びを進めようとする場合に、「それで子どもたちの学力は伸びるのか」と疑問をぶつけられることがある。ただ、ここでの学力は、思考力・判断力・表現力、そして実践力の不足した時代錯誤の「過去型学力」になっていないだろうか。

私が校長をしていた学校では、「学ぶ心に火をつける」子ども主体の学びを継続・発展させてきた結果、6年間で、文部科学省の全国学力・学習状況調査の「算数」のA問題（基礎・基本）で5・68%、B問題（活用能力）では18・22%も平均正答率が向上した。

しかしそれにも増して、この学校では、ESDの定着とともに、教師の指導力が育っただけでなく、子どもたちも共有した問題の解決に向けて対話力を活かすようになり、また先輩の学びや取り組みに憧れて、それを乗り越えていくとする意欲を持つようになった。まさに、「校風」として、温かで誰とでも認め合える対話的で受容的な雰囲気と、日常的なチャレンジシップが醸成されたのである。

これは、校内の全ての教職員だけでなく、保護者や地域の方々も含めた「チーム学校」が作り上げた「夢の学校」の姿だったように思う。

今回は、触れられなかったが、学校でのカリキュラム・マネジメントも重要である。ポイントには教科横断的にカリキュラムの調整を図りながら、学びの充実につなげる視点を持つことである。校長時代は、「ESDカレンダー」という形で、各教科の学習内容がどのように結びついて学習が進んでいくのかが一目で分かるように工夫した。詳しくは、「ESD、SDGs推進研究室」のサイトをご覧ください。

「探究的な学び」は、単に学び方の改革にとどまらず、学校を変え、教育の在り方を変えていくことにつながる。SDGsで掲げられている「質の高い教育」を全ての子どもが受けられるための、現場からの「教育改革」なのである。

「ESD、SDGs推進研究室」
<https://www.esd-tejima.com/>



てじま・としお 東京都江東区立東雲小学校長・同八名川小学校長を歴任。その間、政府ESD円卓会議委員などを務める。教育活性化部門で博報賞を、また八名川小学校では第一回ジャパンSDGsアワード特別賞を受賞。著書に『学校発・ESDの学び』（教育出版、2017年）など。